

# 停車場遺跡

中津市文化財調査報告書第29集

2002

中津市教育委員会

## 例　言

一、本書は中津市教育委員会が2000年度、2001年度に実施した停車場遺跡発掘調査事業の調査報告である。

一、調査は大分県中津下毛地方振興局より委託され実施した。

一、調査団の構成は下記の通りである。

一、調査主体　中津市教育委員会

調査責任者　武吉　勝也（中津市教育委員会教育長）

調査事務　尾畠　豊彦（中津市教育委員会市民文化センター課長）

　田中布由彦（同 係長）

　富田　修司（同 主査）

調査員　高崎　章子（同 主査）

　花崎　徹（同 主任）

一、発掘調査中、宮内克己氏（大分県立歴史博物館）、林一也氏、佐藤良二郎氏、江藤和幸氏（宇佐市教育委員会）より現地にてご助言、ご指導をいただきました。

厚く御礼申し上げます。

一、空中写真撮影は、（株）スカイサーベイに委託した。

一、本書の執筆、編集、遺構遺物実測、写真撮影は高崎が行った。

一、遺物、遺構の製図には金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）の協力を得た。

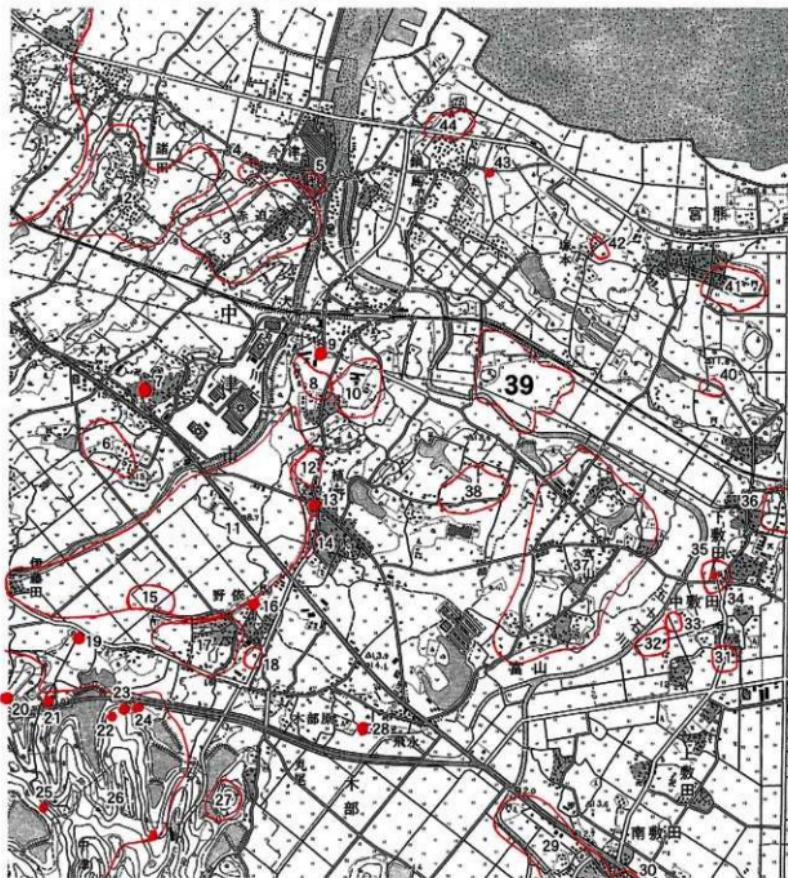
一、現場作業は下記の皆さんの協力による。

今永キク子、植山ヨシカ、植山トミ子、植山京子、辛島雅美、黒川ミユキ、田原文子、  
徳永賀子、松本勲、山縣信夫、若木和美、中村香代子、田中とみ子、花田郁夫、石塔美代子、  
新田勝秀、高松誠一郎、高松康哉、乙咩麻美、古庄隆浩、穴井美保子、清永洋美、上川幸枝  
松永理恵、松村たか子、塩谷絹子（順不同）

## 目 次

第一章 地理と歴史的環境	1
第二章 調査に至る経緯	3
第三章 平成 12 年度調査の概要	
1 工事計画について	4
2 調査方法について	4
3 試掘調査の概要	7
4 SK-1 について	8
5 SD-1 について	11
6 本調査を要する範囲	11
第四章 平成 13 年度調査の概要	
1 調査の内容	12
2 溝	12
3 挖立柱建物	15
4 土坑	17
第五章 出土遺物について	18
第六章 まとめ	19
図版 1 ~ 6	

# 第一章 地理と歴史的環境



第1図 中津地方遺跡分布図

< 遺跡名 >	< 時代 >	< 遺跡名 >	< 時代 >	< 遺跡名 >	< 時代 >
1 宮留遺跡	(弥生・古墳)	16 野佐古墳	(古墳)	31 織田城跡	(中世)
2 路出遺跡	(弥生・古墳)	17 松尾遺跡	(弥生・古墳)	32 前述跡	(古墳)
3 十面堀遺跡	(古墳・中世)	18 野伏城跡	(中世)	33 西和田貝塚	(縄文)
4 石丸城跡	(中世)	19 是御塚	(中世)	34 京都遺跡	(弥生)
5 宋久城跡	(中世)	20 夜鳴山西塚跡	(古墳)	35 長谷の宝塔	(中世)
6 中尾城跡	(中世)	21 鎌・泊窓跡	(古墳)	36 古久遺跡	(古墳・小国)
7 大丸城跡	(中世)	22 山田池廻跡	(古墳)	37 富山遺跡	(縄文・少文化)
8 石枕遺跡	(弥生・古墳)	23 人池廻跡	(古墳)	38 植野遺跡	(弥生・古墳)
9 右側古墳	(古墳)	24 及ノ池廻跡	(古墳)	39 停車場跡	(弥生・古墳・古代)
10 中須遺跡	(古代)	25 小千瀬遺跡	(古墳)	40 西入込塚跡	(古墳)
11 野伏地区条里跡	(古代・中世)	26 野伏・伊豆宿跡群	(古墳・古代)	41 城道跡	(中世)
12 横野町監造跡	(弥生・古墳)	27 清水廻跡	(中世)	42 尾宿石棺	(弥生・古墳)
13 横野貝塚	(縄文)	28 六ヶ古墳	(古墳)	43 須烏扒塚古墳	(古墳)
14 横野古城遺跡	(弥生・古墳)	29 大根原遺跡	(弥生・中世)	44 須烏遺跡	(古墳)
15 野伏遺跡	(弥生・古代)	30 向野遺跡	(弥生・古代)		

中津市は大分県の北端に位置する面積約 56km<sup>2</sup>、人口約 67,000 人の中核都市である。西限の山国川をはさんで福岡県と、南は三光村、東は宇佐市と接し、北は周防灘に面す。平坦な地形で、南部に八面山を控えた洪積台地と、台地を分断する河川によって作られた沖積平野よりなる。主要遺跡は河川流域に分布する。

山国川沿いでは、南の台地上に弥生時代集落跡の上ノ原遺跡や、上ノ原横穴墓群がある。古墳時代から古代中世近世まで墓地群を形成する相原山首遺跡が見下ろす山国川自然堤防沿いには、古代寺院の相原廃寺を有する古代集落が展開する。相原廃寺の北を東西に古代官道が横切り、台地上に下毛郡衙正倉に比定される長者屋敷遺跡が立地し、平野部には県下最大級の条里跡である沖代条里の地割が広がる。山国川河口近くの高畠遺跡からは縄文時代の土偶が出土した。また近世、河口沿いに九州最古の近世城郭である中津城が築城された。

八面山より発した犬丸川沿いでは、福島台地上に縄文時代後期集落の棒垣遺跡、入垣貝塚がある。弥生遺跡としては、福島遺跡から二列埋葬の墓坑群とともに祭祀遺物が大量に発見された。古墳時代には岩崎横穴墓群や城山横穴墓群、洞上横穴墓群などの墓が山裾に次々作られ、伊藤田城山窯跡、ホヤ池窯跡など多数の登り窯が造られた。また、半地では横多田遺跡などの集落遺跡も出現する。奈良時代には丘陵突端の森山遺跡に火葬墓が作られ、野依条里も展開する。中世には山中城、野依城、犬丸城などの中世城館が作られる。犬丸川の河川改修工事で発掘された犬丸川流域遺跡群からは、縄文時代から中世までの遺跡の展開が再確認されている。

また海岸部では、丘陵上に蛸壺焼成坑が群集する定留遺跡や、中世城館の諸田遺跡など、古代から中世の遺跡が濃密に分布する。

停車場遺跡が隣接する五十石川は、中津市側の犬丸川と宇佐市側の伊呂波川の中間に位置する。宇佐市域の八面山裾のため池に端を発し、通称「長峰原」台地を潤しながら北上し、遺跡南端で中津市域に入り、犬丸川河口と合流する。約 1.3km 上流の宇佐市域では、京徳遺跡、吉久遺跡がある。京徳遺跡は弥生時代後期の墓地群で、東西 20m、南北 30m という狭い調査区内に石蓋土坑墓 36 基、土坑墓 11 基が検出された他、古墳時代の集落の存在も確認されている。また、吉久遺跡は中世の居館跡、土坑墓 30 基、井戸、掘立柱建物などが検出され、青磁、宋錢、瀬洲鏡など貴重な出土品がある。宇佐市域側での貴重な発掘結果に比べ、中津市側の当遺跡では、これまで五十石川沿いの低丘陵の畑地が遺物包蔵地として周知されていたが、今回、川と台地に挟まれた平坦な水田地帯より遺跡が検出されたため、周知遺跡の範囲を拡大する手続きをとった。当遺跡に本格的な調査が入るのは今回が初めてとなった。

参考文献 「中津市史」1965 中津市史刊行会

栗焼窯跡「犬丸川流域遺跡群」中津市文化財調査報告書第 19 収 1996 中津市教育委員会

乙畔政巳「京徳遺跡 2 次調査」「宇佐地区遺跡群発掘調査概報」1990 宇佐市教育委員会

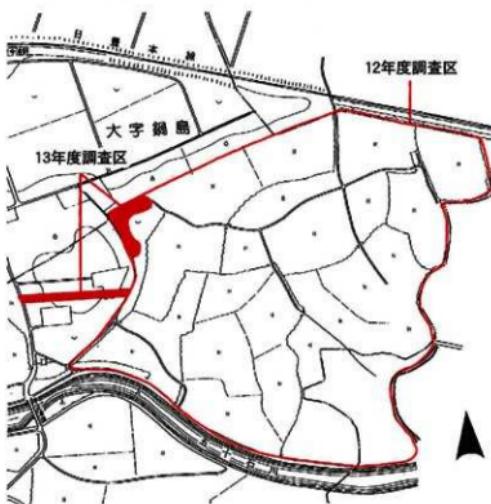
## 第二章 調査に至る経緯



第2図 停車場遺跡調査区位置図 ( $S = 1/25,000$ )

大分県中津下毛地方振興局は、中津市大字植野に県営土地改良総合整備事業の一環として区画整理工事と農道整備工事を行うことになった。予定期工は平成13年度4月から平成14年度3月であった。工事対象地は五十石川に隣接する水田地帯と、その西側の低丘陵で、古墳時代の遺物包蔵地

として周知される停車場遺跡に隣接する。中津市教育委員会では遺跡認調査が必要と判断し、平成12年度、試掘調査を実施した。調査の結果、水田部分及び隣接する畑地から遺跡が確認されたことから、平成13年度、本調査を実施した。本調査地点は、工事計画で削平される恐れのある地点と12年度試掘調査結果とを見比べ、調査区を設定した。



第3図 12年度・13年度調査区位置図 ( $S = 1/5,000$ )

### 第三章 平成 12 年度調査の概要

#### 1. 工事計画について

工事対象域は南を五十石川、西、北を低丘陵にはさまれた、10.1ha の水田地帯である。五十石川の氾濫原で、地下水位の高い土地であり、特に北側の丘陵下は水位の高い深田であった。東側は一部宇佐市域にまたがる。工事対象地より西側の宇佐市域では、すでに圃場整備が行われており、現地は取り残された形になっていた。もともと平坦な土地であるため、工事により大幅な掘削が行われたり、逆に大量の盛り土をされたりする予定はない。現地は水路、川などにはばまれ、四方道路に接していない。そのため、水の流れを確保する若干の高低をつける工事をしたのち、水田を東西に横切る直線の農道をとりつける。その農道は西の低丘陵を掘削し、道路へとつながる。

#### 2. 調査方法について

平成 12 年度は水田部分と、丘陵沿いにある、若干の畠地の試掘調査を行った。水田部分は北側が標高 5.7 ~ 6.0m。南が 5.2 ~ 5.6m と、南に行くほど低くなっている。調査に先立ち、大分県中津下毛地方振興局より工事対象地の削平、盛り土計画の図面を提出してもらった。各水田を 10cm 単位で色分けし、盛り土する場所、高さの変わらない場所、10cm 削られる場所、20cm 削られる場所、30cm 削られる場所・・・という図ができるあがった。試掘調査は重機によるトレンチ掘りで、全域にまんべんなくトレンチを配置した。遺構が確認できた場所は、遺構の方向をもとにさらに細かくトレンチをいれ、遺構の範囲の確定に努めた。トレント数は全部で 44 本である。その内、1 ~ 10 のトレントで遺構を確認した（第 4 図）。試掘結果と工事計画の色分け図をもとに、工事が遺構面まで達さない場所については本調査の必要はないものとし、遺構面が削平される場所、削平される危険性のある場所



写真 1 発掘前風景



写真 2 第 1 トレント遺構検出状況



第4図 12年度トレンチ配置図(S=1/2,000)

のみ本調査の対象とした。

### 3. 試掘調査の概要

試掘調査の結果、遺構を確認できたのは、1～10のトレーニチである。

1トレーニチからは十字に交差する溝と方形の土坑を検出した。2トレーニチからは1トレーニチの延長の溝を検出した。

3～7トレーニチまで同様の溝が確認されている。溝の幅はいずれも60～80cm、深さは30～50cmで、断面U字形である。黄褐色粘土層の地山に掘り込まれ、黒灰色粘質土が堆積している。トレーニチ確認のため正確な形はわからないが、溝が様々な方向を向いていること、1トレーニチの土坑SK-1以外には土坑、柱穴等の遺構がみつからないこと、出土遺物がほとんどなく、土器の細片のみであることなどから、小区画水田の水路ではないかと判断した。

残念ながら、トレーニチの壁面に畦の痕跡は確認できなかった。

3、4、5トレーニチでは溝の上に淡褐色の層が確認でき、瓦器の細片が散在することから、中世の耕作土と思われる。

8トレーニチからも溝が検出されたが、他のトレーニチと埋土が異なり、近世以降のものと判断した。

1～8トレーニチのあたりが比較的現地表面から浅い位置(20～40cm下)で遺構面



写真3 第2トレーニチ

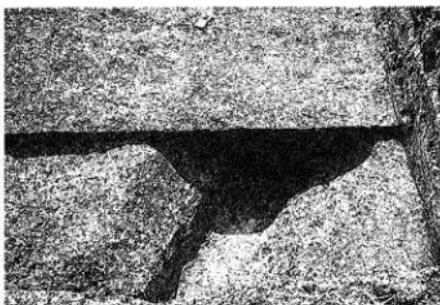


写真4 第3トレーニチ



写真5 第4トレーニチ

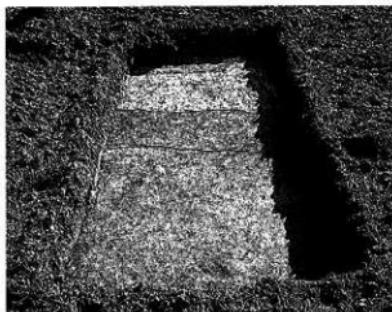


写真6 第6トレーニチ



写真7 第8トレンチ

に到達するのに対し、北側の丘陵下では50～60cm掘り下げてようやく地山に達した。地下水位が高く、土器の細片は全く見られず、遺構も確認できなかったことから、このあたりには遺構はなかったものと判断した。



写真8 第10トレンチ

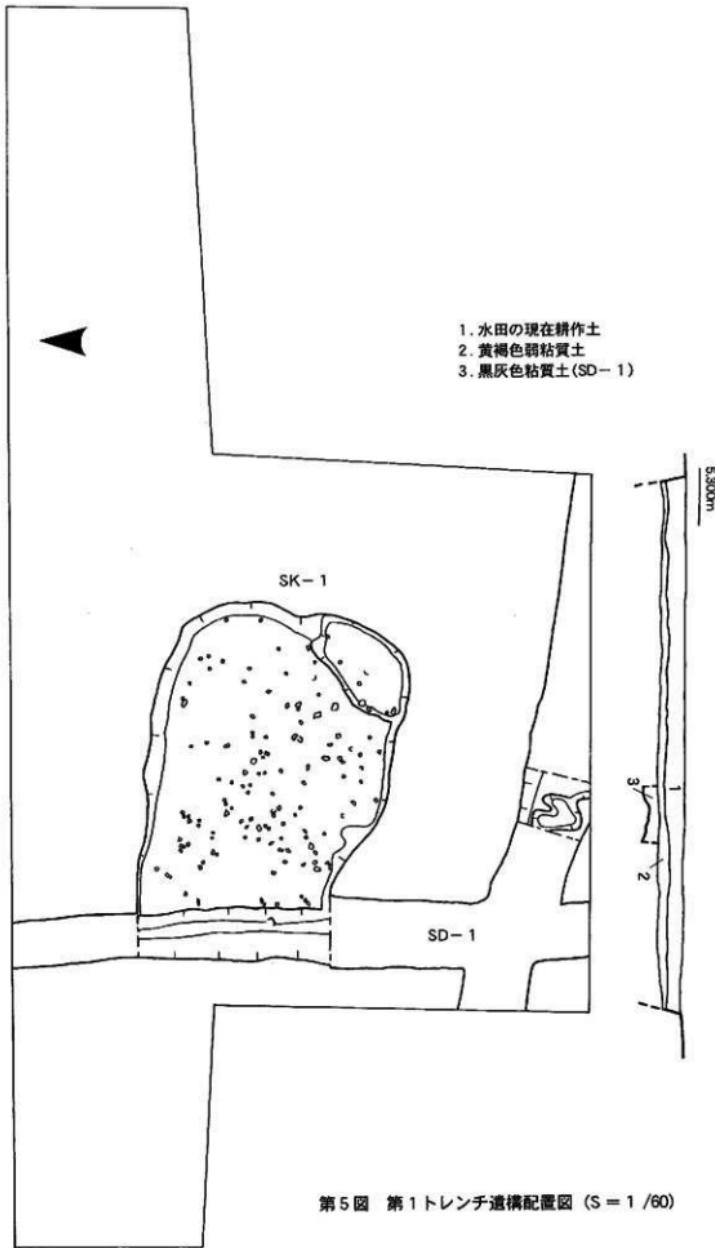
9、10トレンチは標高6.5～6.8mの畠地である。9トレンチからは柱穴が確認でき、上師器細片が散布していた。10トレンチではすでに削平を受け、遺構の確認はできなかった。

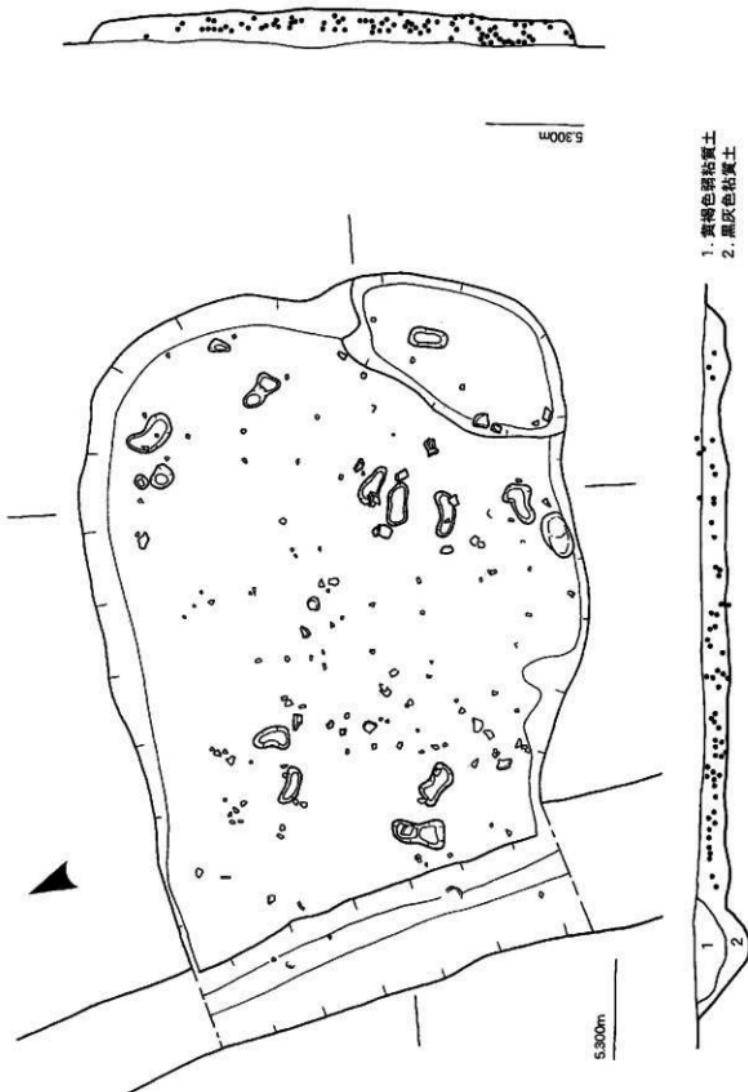
#### 4. SK-1について

SK-1は縦横約3.8m×3.1mの丸みを帯びた長方形で、深さは約20cmと浅い土坑である。SD-1と接しており、覆土はSD-1と同じく黒灰色粘質土で、土層観察でもきり合いのラインが確認できなかった。SK-1とSD-1はほぼ同時期と思われる。



写真9 第1トレンチ SK-1遺物出土状況





第6図 第1トレンチ SK-1 (S = 1 /30)



写真 10 第1トレーニング SK-1

S K - 1 の床面は多少起伏があるが、おおむね平らである。直径 20cm ほどの小さな窪みが点在する。足跡の可能性も考えたが断定できなかった。遺物は土師器、須恵器が多数散乱するが、いずれも小片である。S K - 1 は遺構の形が不整形であること、柱穴がないこと、他の場所に遺物がほとんどないのに比べ、S K - 1 のみ集中していること、S D - 1 に接していること、などの特徴がある。当初、住居址や、作業小屋のようなものを想定していたが、柱穴がなく、床面には若干起伏があり長期間床として使用されたとは思えず、水田の中に短期間使用する施設のようなものを作ったと考えられる。

### 5. S D - 1 について

S D - 1 は S K - 1 とほぼ同時期と思われるが、後に黄褐色弱粘質土で塞がれている。断面は U 字形で、幅約 80cm、深さ約 35cm である。十字に交わっており、同様の溝が他のトレーニングでも確認された。水田の水路であろう。S K - 1 と接した場所では、S K - 1 から流れ込んだ遺物が出土したが、他の場所ではほとんど遺物は確認できなかった。1 トレーニングでは、S K - 1 の性格を把握するため、完掘したが、S D - 1 は遺構検出と、一部掘削にとどめた。

### 6. 本調査を要する範囲

試掘調査の結果、第 7 図に赤く表示した二箇所を、本調査を要する範囲に指定した。そのうち、南側の水田部分については、工事計画では遺構面が傷つけられないため、今回本調査は実施せず、もし計画が変更されたときは調査を行うこととした。北東隅の鍵状の畑の部分は大幅に削平されることから、13 年度に本調査を行うこととした。



第 7 図 本調査を要する範囲 (S = 1 /5,000)

## 第四章 平成 13 年度調査の概要

### 1. 調査の内容

13 年度は 12 年度調査で本調査が必要と判断した、北東隅の畠部分と、12 年度調査区の西側に隣接する標高約 11.8m の台地部分である。台地上は水田面につながる道路を通すため、掘削される予定の箇所である。ここでは、道幅にそって三箇所トレンチを空けて遺構確認調査を行った。しかし、すでに削平をうけていたようで、すぐに地山に到達し、遺構、遺物とも確認できなかった。そのため、工事を行うには支障がないものと判断した。

畠部分は北東隅に鍵状にまがる土地で、幅約 3 m ~ 7.8m、総延長約 63m。面積約 350m<sup>2</sup>である。重機にて表土を除去すると、遺構面は標高約 6 m ほどで、ゆるやかに水田方面に

むかって傾斜していた。調査区の形に添うよう、細長い溝が鍵状にのびていた。また、土坑や、掘立柱建物も検出された。



写真 11 SD - 5



写真 12 SD - 2, 4, 5

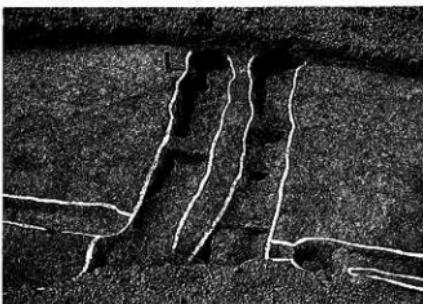
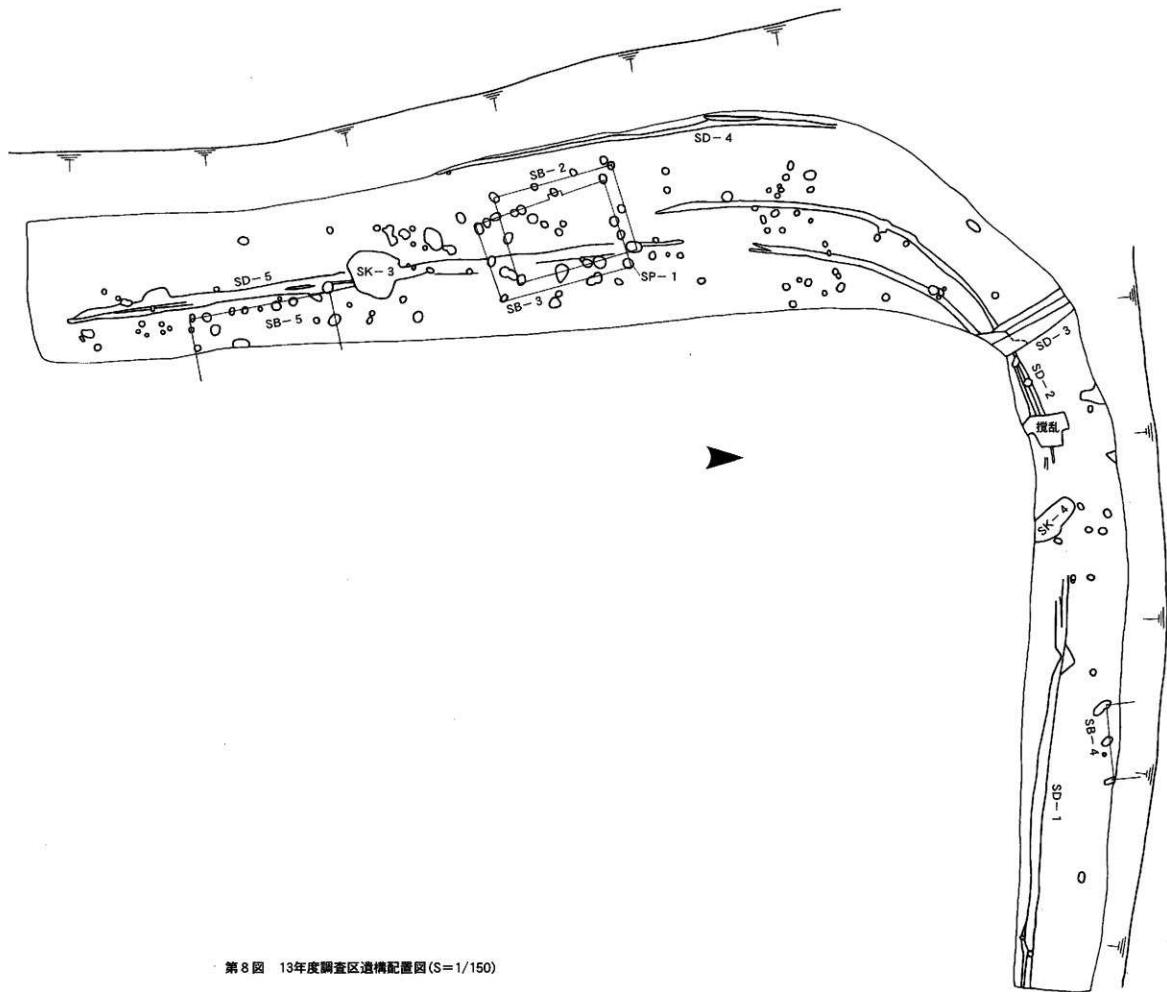


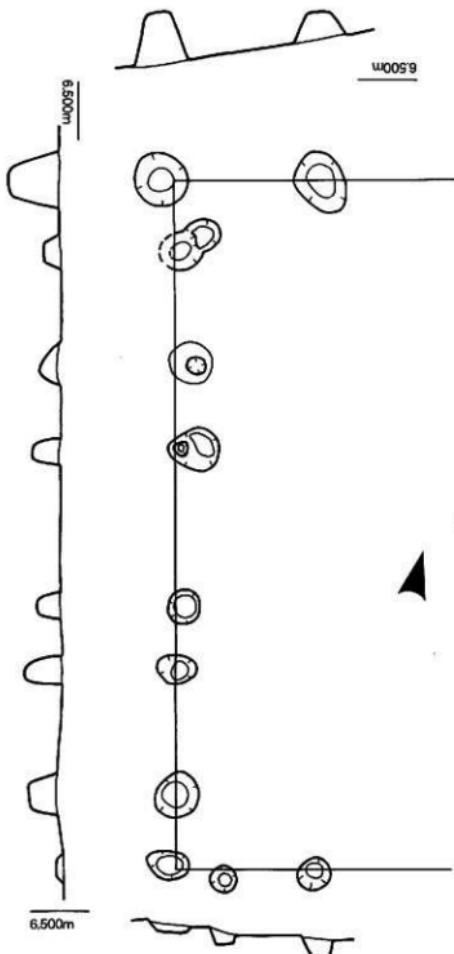
写真 13 SD - 3

### 2. 溝

SD-1 ~ 5 まで、細長い溝が検出された。いずれも幅約 20 ~ 40cm。一度同じ位置で掘りなおされたのか、二重に溝が重なっている。コーナー部付近では SD-5 と 2 と 4 が並行しておらず、SD-5 と 2 の間隔は約 1.5m。SD-2 と 4 の間隔は約 3 m である。溝の性格は不明であるが、地形にそって曲がっており、畠の畝をつくるための溝の痕跡ではないだろうか。SD-3 のみ他の溝とは様相が異なる。他の埋土が暗褐色であったのに対し、こちらは淡褐色で、広いところで幅約 75cm。北側が浅く、南側が深くなる。他の細い溝を切って作られており、水路と畦ではないかと思われる。12 年度調査区で中世の遺物を包含していた上と似ており、中世以降のものと判断した。



第8図 13年度調査区構造配置図(S=1/150)



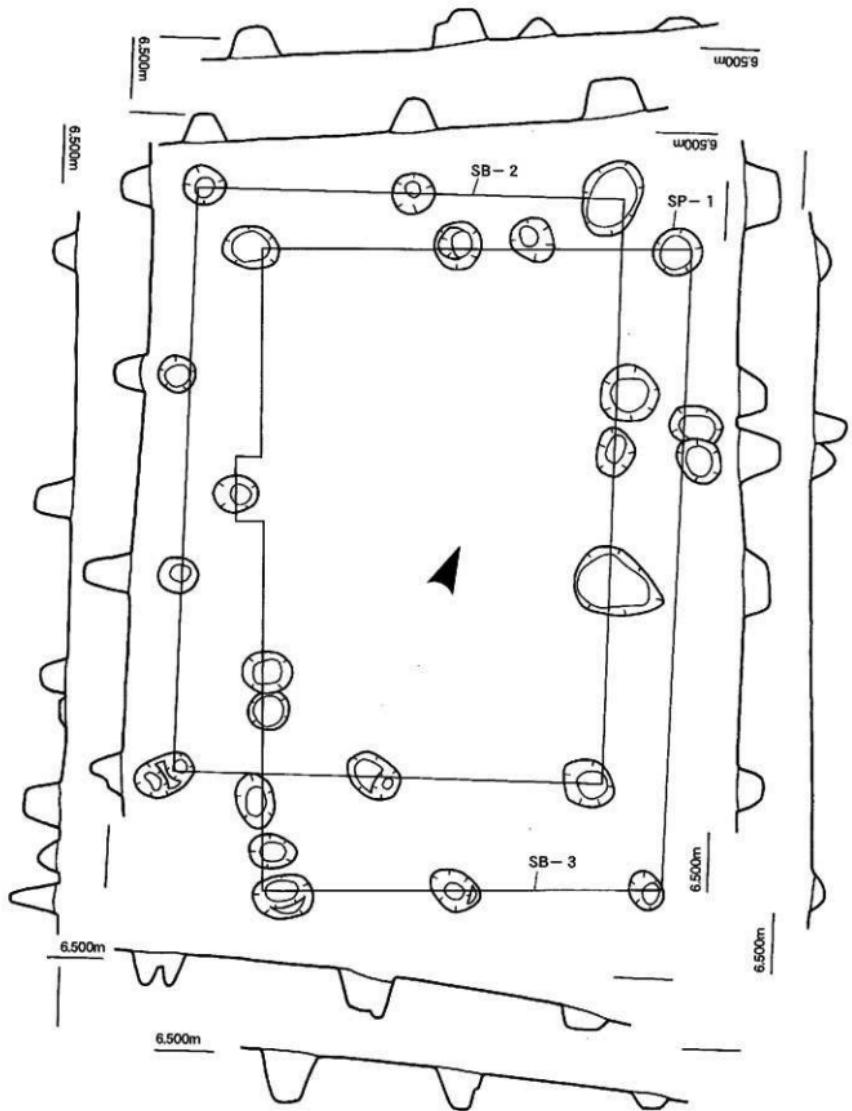
第9図 SB-1 (1 /40)

### 3. 挖立柱建物

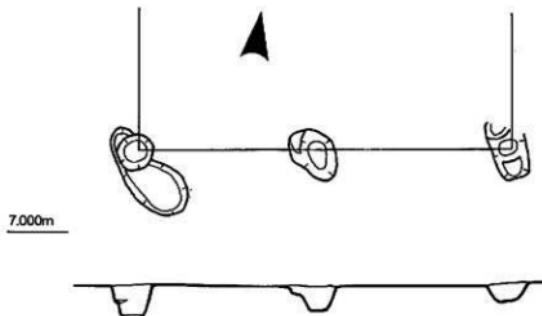
SB-1～4まで計4棟の建物を検出した。建物の柱穴は細長い溝を切って掘削されている。

SB-1は南端にあり、東側が調査区外になることから全形は不明であるが、南北棟と思われる。また東側に向かって地形が傾斜しており柱穴が浅く特に西側では建物に伴う柱穴を特定できなかった。柱穴規模は最大で径約50cm、深さ約45cmである。主軸の方位はW-12°-N、南北長約5.6mである。

SB-2、SB-3はSB-1の北側にある南北棟建物で、2間×3間。SB-2は主軸の方位がW-23°-N、4.8m×3.5m、面積約16.8m<sup>2</sup>。柱間寸法は南北が約1.6m、東西が約1.75mである。柱穴規模は径35～60cm。深さは最も深いもので約36cm。柱穴はほぼ等間隔に一直線にならんでいる。SB-3はSB-2に重なるようやや東に位置をずらして建てられている。3間×2間の南北棟。主軸方位は西側がW-25°-N、東側がW-25°-N。5.3m×3.5m、面積約18.55m<sup>2</sup>。やはり東に傾斜する地形なので、東に行くほど柱穴が浅くなる。柱間寸法は南北が1.7m、東西が1.64m～1.75m。柱穴規模は径約36cm～48cm、最も深いもので深さは約45cmである。北東隅のSP-1からは第12図7番の土師器壺が出土した。SB-1からの距離はSB-2が約7.3m、SB-3が約6.3mである。SB-2と3の柱穴はきり合いかなく、先後関係は不明であるが、2の方が建物の形が整い、3より若干SB-1と平行することから、SB-1、2、4が同時存在し、SB-2からSB-3へ建替えが行われたと思われる。



第10図 SB-2、SB-3 (S = 1 /40)



第11図 SB-4 (1 /40)

SB-4は調査区の北端にあり調査区外にでるため全形は不明。東西方向に3つの柱穴が並ぶ。東西を2間とした場合3m。柱間寸法は1.5m。主軸方位W-11°-N。柱穴規模は径約40cm、深さ約30cm。

SB-1~4の主軸はそれぞれわずかにずれがあるが、ほぼ南北方向に並んでおり、建物規模も近いことから、同時期のものである。床面積はいずれも20m<sup>2</sup>以下と小型の側柱建物であり、柱穴もさほど大きくななく、一般集落のクラスと思われる。

#### 4. 土坑

SK-1とSK-2の二つの土坑を検出した。いずれも浅いレンズ状の窪みで、SK-2は全形が不明。SK-1は最大径約2.1mで、深さ約30cm。やはり東側が削平をうけて浅くなる。数点の上師器小片が出土した。埋土は掘立柱建物と同じ黒褐色土で、建物と同時期の廃棄土坑であろう。

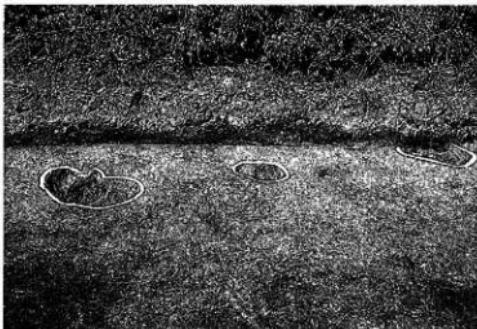


写真14 SB-4

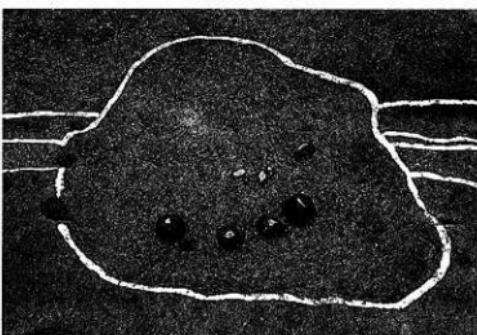
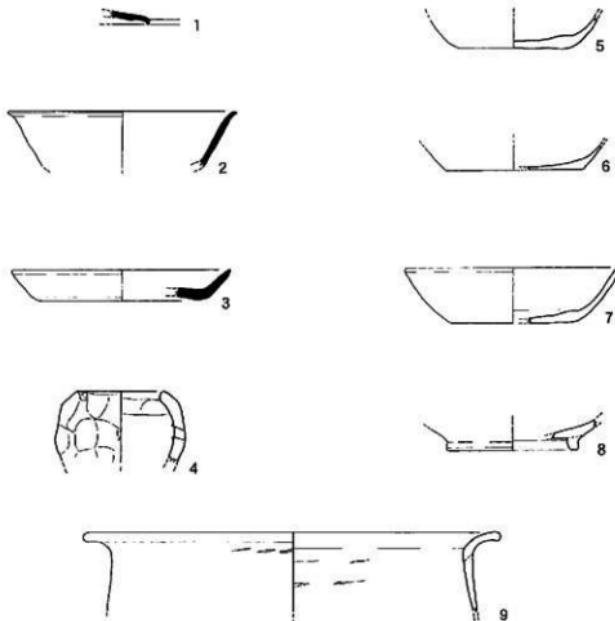


写真15 SK-3

## 第五章 出土遺物について

平成 12 年度調査の遺物はその大半が第 1 トレンチより出土した。1、2、9 は、第 1 トレンチ SK-1 出土。1 は須恵器坏蓋口縁部。器高は低い。口縁端部は断面逆三角形で、垂直に下がる。小片のため、法量は不明。暗灰色。焼成は堅緻で、胎土は精良。2 は須恵器坏身。体部は水引痕明顯。直線的に上方へ開き、口縁部わずかに外反する。器壁は薄い。復元口径 14.2cm、器高推定約 4.0cm、底径 10.0cm。暗灰色、焼成は堅緻、胎土は精良。9 は土師器壺口縁部。体部はわずかに内傾し、口縁部は短く外反する。口縁部は横なでだが、内外面は笠状工具で、縦になでられており、外面の頸部には工具を止めた圧痕が連続する。内頸部には粘土積み痕が残る。復元口径約 26.2cm。橙褐色、焼成は良好、胎土に斜長石と白色微粒子を含む。

5、6、8 は第 1 トレンチ SD-1 出土。5 は土師器坏身。底部は回転箝切り。体部はややふくらみながら開く。内外面で調整であるが、摩滅により不明瞭。器壁は厚い。復元底径 6.6cm。淡い橙褐色、焼成はやや不良、胎土に角閃石、斜長石を一定量含み、白色微粒子もわずかに見られる。6 は土師器坏身。底部は平らで、体部は底部と明瞭な境をもち開きながら立ち上がる。器壁は薄い。復元底径約 8.6cm。内外面で調整だが、摩滅により不明瞭である。淡い橙褐色。焼成は良好。胎



第 12 図 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

土に斜長石を含む。8は土師器碗底部。貼り付け高台は断面丸みのある方形で、体部は開きながら立ち上がる。内外面回転横なで。復元底径約8.2cm。橙色で、焼成は良好、胎土に斜長石を大量に含む。

3は12年度調査区の一括遺物である。須恵器皿。底部はやや上げ底ぎみ。体部は直線的に外方に開く。内外面回転横なで。復元口径約13.6cm、器高1.9cm、復元底径約11.0cm。暗青灰色、焼成は堅緻、胎土は精良。4は13年度調査区のSD-4より出土。土師器壺である。器壁は厚く、口縁端部は丸く取まり、内傾する。体部は膨らみ、体部外面には指押さえの痕跡が全面にある。内面は横なである。体部には径が0.5cmほどの穿孔があり、焼成前に外から中へ貫通させていることがわかる。復元口径約5.4cm。淡い黄褐色で、焼成はやや不良。胎土に多量の斜長石と、少量の角閃石を含む。7は13年度調査区のSB-3のSP-1より出土した土師器壺身である。底部は平らで、体部は底部と境をもちふくらみながら上方に開く。口縁端部はとがりぎみ。器壁はやや薄い。底部には回転窓切りの痕跡が残り、内定部と体部外面は回転横なで。復元口径は約13.6cm、器高3.5cm、復元底径約7.8cm。橙褐色で、焼成は良好、胎土に斜長石を多量に含む。

以上の遺物、及び図化しえなかった小片を概観すると、底部切り離しに糸引き痕が見られず、総て回転窓切りはなしであること、体部が垂直に立ち上がらず、開いていること、回転窓磨きの痕跡が認められないこと、土師器の割合が多いこと、須恵器の蓋は器高が低いこと、須恵器皿が認められることなどの点を考慮すると、8世紀後半から9世紀前半の時期幅におさめることができる。

## 第六章　まとめ

平成12年度、13年度とも遺物量は少ないものの、ほぼ同時期の遺構と判断できた。この遺跡は五十石川のそばに開発された古代の水田地帯と、水田を経営していた人びとの集落である。水田には水路をめぐらせ水を管理していた。

通常水田面から遺物が出土することはごくまれであるが、12年度調査区のSK-1と、SK-1に接するSD-1からは小片ながら遺物が集中して出土した。住居のようなものとは考えられず、当初水を管理する管理小屋のようなものを想定したが、あまりに水路に接していることから、豊作を祈願する水田祭祀を行っていた場所も想定している。

この時期は、すでに律令制が浸透し、平野部には条里が施行され、安定した水田経営の技術が確立された時代である。沖代条里以外にも大悟法や犬丸川沿いに小規模な条里が施行された。この遺跡のように川沿いの平坦な土地では次々水田へ開発がなされていったのであろう。

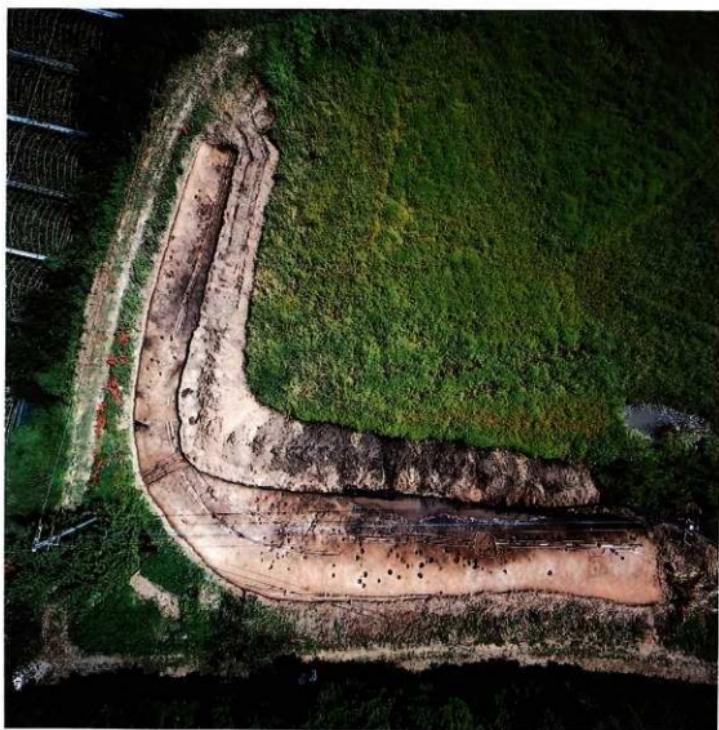
また13年度調査区の細長い溝は畑の畝を連想させる。溝の形が現在の地形にそっており、古代から同じ地形を維持してきたことがわかる。当初畠地だった場所に建物を建て、水田経営へと切り替えていった足跡を物語っているのであろうか。

この低地に望む周辺の丘陵は現在広く畠地として利用されており、ほとんど開発という破壊を免れている土地である。近接した宇佐市域では重要遺跡が展開しており、今後に期待したい。

# 写 真 図 版



(1) 12年度調査区全景



(1) 13年度調査区本調査部分



(1) 13年度調査区北側



(2) 13年度調査区東側



(1) SB - 2

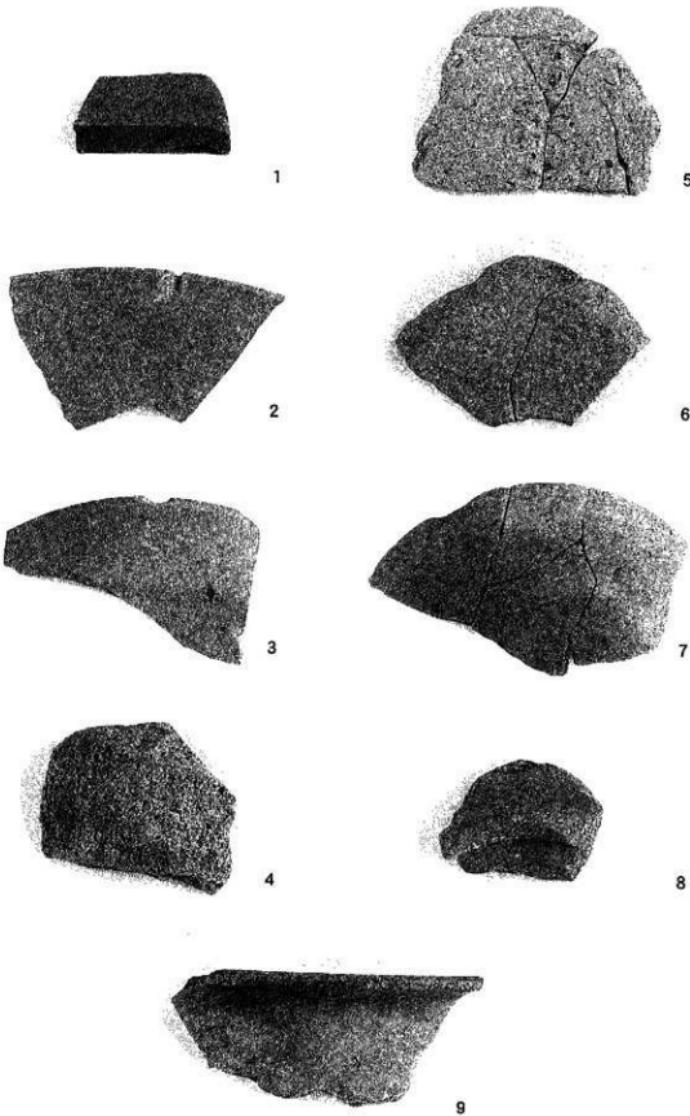


(1) 13年度調査区全景



(2) 調査風景

図版 6



## 報告書抄録

ふりがな	ついしやばいせき
書名	停車場遺跡
発行者名	
卷次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告書
シリーズ番号	第29集
編著者名	高峰章子
編集機関	中津市教育委員会
所在地	大分県中津市豊田町 14-3
発行年月日	2003年2月28日
所収遺跡名	停車場遺跡
所在地	大分県中津市大字植野 2143 他
市町村コード	44203
遺跡番号	101101
北緯	33° 33' 52"
東経	131° 16' 45"
調査期間	20020220 ~ 20020327 20020827 ~ 20021130
面積	10.8ha
調査原因	県営土地改良総合整備事業に伴う区画整理事業、農道整備工事
種別	水田・集落
主な時代	奈良～平安
主な遺構	水路・土坑・掘立柱建物
主な遺物	土師器・須恵器
特記事項	

**停車場遺跡**

**中津市文化財調査報告 第29集**

2003年2月28日

発行 中津市教育委員会

印刷 第一印刷株式会社